

チルト3度の快戦と6コースの快走

# 伝説の航跡

## 百物語

文 鍋島ヒロシ

形勢一転。  
一発逆転。

今年前半で印象的だったボートシーンに、ウエスタンヤングの優勝戦がある。新開航が初体験のチルト3度を使いこなして、6コースまくりを決めたあのレースだ。

唐津の開催。佐賀、佐賀、佐賀のシリーズだったが、新開は最後の最後で大勢を覆した。外様で機力劣勢に立たされながら、ぶつつけの取り付けを見事に当てた。チルト3度を専門にする選手はいなくなっても、隠し芸にする選手はいる時代。とはいえ注目度の高い一戦で、これほど鮮やかに戦法・戦略がハマるとは！ 飛び道具のイメージが強く、6コースとセットになりがちなチルト3度だが、この取り付けとともにSGタイトルを奪取したケースは、これまでに一度しか記憶にない。しかもその時は6コースでも、ダツシユ戦ですらなかった。

◎第2回オーシャンカップ競走

平和島(優勝戦・97年7月21日)

①太田 和美(大阪) 233141

②熊谷 直樹(北海道) 112311

③濱村 芳宏(徳島) 411121

④野長瀬止孝(静岡) 542122

⑤植木 通彦(福岡) 5211452

⑥池上 裕次(埼玉) 133112

チルト3度の主は熊谷直樹。ここまでの進入は424642コース。初戦を1・5度でまくったものの、そのアシに物足りなさを感

じて、2日目から3度に上げた。そして2コースから強烈な差を決め、3日目は2・3着とはいえず競った結果。競り負けた松井繁の「熊谷さんの回りアシは凄い」の言葉を待つまでもなく、本人は「ここで周年を取った時より出ている」。その2年前はオール2連対でGI初優勝、つまり超抜を実感していた。

モーターの取り付け位置が違って、チルト3度が伸びに特化するのとは後のこと。むしろプロペラを回してコーナーを軽快にする効果が狙えた。この優勝戦における他5選手のセッティングを見ても、太田、濱村が1度で、野長瀬、植木、池上は1・5度。ここらあたりが主流だった。2度、3度は少なくても希少というほどではなく、大森健二、西島義則といったインタイプの選手が、3度にしたシリーズだった。

熊谷は3勝目を強ツケマイ、準優ではインを置き去りにした。決戦前日のインタビューでは「伸びは池上と一緒に回りアシは節一」と言い放ち、直前の控室では「ここは平和島、絶対に勝つ」と自らに言い聞かせた。因みに池上裕次のモーターは、使用2節ながら2連対率94%。B1級選手で準優勝、A2級選手なら準パーフェクト優勝という、すこぶるつきの評判機だった。こちらも「こんなアシは初めて」と乗り手絶賛も、熊谷はそれをも凌駕していた。

平均年齢29・3歳。全員が3千番台で争われた初めてのSG優勝戦は、濱村のイン取りで始まった。熊谷は無理に付き合わず2コース進入。回り込んできた植木までがスローに並んだ。そして大きく引張って太田、野長瀬、池上の3対3の進入隊形。そこからの熊谷が物凄かった。

インの濱村がスリット先手。「いいスタートが行けたが」別に落としたわけでもなかった。熊谷は3分の1艇身ほど後れを取っていた、その後だ。グングン出ていき内を飲み込んだ。みるみる外は引き離された。栄勝のまくりになった。ターンの返りも申し分なかった。一瞬迫った太田のまくり差しも「見えなかったですよ」と簡単に止めた。熊谷の独壇場になった。「北海道へ届け、熊の雄叫び。やつた、やつた」

最終バック、実況のボルテージがヒートアップする中を、熊谷は独走していた。後方では伏兵の野長瀬が人気の植木を制して二番手を確保、ヒモ荒れの決着となったが、勝者は堂々1番人気に応えたのだ。

そう、歴史に残るチルト3度の優勝は、人気薄でも大外でもなかった。熊谷は4度目の優出機会を狙いの地元SGで、狙いのセッティングで、初の戴冠に実らせた。振り返れば3年前の笹川賞FがSG初優出で、いきなりショックに見舞われたが、1年の除外期間を

過ぎしてからは、2回のSG優出と4個のGI優勝を記録、着々実績を積み重ねてきた。機は熟していたのだ。

3年前にSG優勝戦でFなら、5年前にはメニエール病に苦しめられた。熊谷は困難を反骨精神で乗り越えてここまで来た。奇しくもこの年の3月には、故郷の北海道に居を移して、改めて仕事や家族に向き合った。本当にいいタイミングでの優勝になった。3年後の笹川賞で2度目のSGタイトルの手にし、4度出た賞金王の舞台では、すべてで優出し準優勝2回を記録している。東京支部を代表する強豪の一人として、長年活躍したのは周知の通りである。

この後、2000年代に入るとチルト3度は、これに即したプロペラと相まって、伸びに特化したセッティングになっていった。阿波勝哉の初優勝が02年9月、04年には年間V4を6コースまくりで記録した。これは面白い...と考える選手が出てくるのは自然の流れだった。矢後剛は支部やプロペラグループを見ても、近しい間柄だといえた。

## ◎第53回つじ賞王座決定戦 津(優勝戦・05年5月19日)

- ①濱野谷憲吾(東京) 11111221
- ②矢後 剛(東京) 1213131
- ③辻 栄蔵(広島) 423121
- ④山崎 智也(群馬) 212132
- ⑤坪井 康晴(静岡) 1123232

⑥高沖 健太(三重) 1633142  
1番人気は梓番と成績から一目瞭然。濱野谷は4年前の大会覇者にして、翌年の大会に優勝する当地巧者の一人だった。矢後がこれに次ぐ成績で優出してきた。その内容がまたユニークで、梓番が2345161梓に対して、進入が4655161コース。1号艇以外はダッシュに徹しチルト3度で戦ってきた。最後の2号艇ではどうするのか?

矢後はフアンの意見を訊いたのである。朝の公開インタビューで「梓なりでいいですか」と言えば、場内がシーン。「3度で6コース」の言葉にはドツと沸いた。訊くまでもなく本人の腹は決まっていた。

従って初手から6コース。即ち並びは①③④⑤⑥②。山崎がチルト3度のいるレースにありがちな3カドにした。矢後は一瞬立ち遅れたように見えた。実際は全艇のスタートが遅かった。矢後が80mポールを通過したあたりから出て行きだした。

コンマ36。それでも矢後はスリットラインでは、2コースに辻とともに最も先手を取っていた。昔ならいざ知らず、記念の優勝戦では極めてレアな、6艇揃って遅いスタートのレースとなった。矢後にとっては何よりだった。握り込みを犠牲にして、伸びを偏重するチルト3度のセッティングでは、スタートのアジャストは致



命的になる。このスリット隊形なら安心してレバーを握れた。スリット過ぎから額面の行きアシ↓伸びを見せて、内5艇を飲み込んだ。内寄りで差し凌いだだが、2マーカー手前で接近してきたが、慌てず押さえ込んでチルト3度による記念優勝を決めた。

彼がチルト3度や取り付けの工夫を楽しそうに話していたことを思い出す。矢後剛というボートレーサーには、優れた戦略家のイメージがある。天才肌の濱野谷憲吾に集まった人気を、自らの作戦で覆したのは快感。まさに会心の勝利となった。

チルト3度の記念優勝を探せばもう一件、3年後のダイヤモンドカップがある。平和島である、勝ったのはまたも東京支部である。さすがは場内のレストランに「チルト3井」があったところである。オープニングから「3度」が威力を發揮した。

### ◎ダイヤモンドカップ競走

平和島(優勝戦・08年7月17日)

- ①作間 章千葉 3141211
  - ②瓜生 正義福岡 3224131
  - ③長岡 茂一(東京) 1521361
  - ④菊地 孝平(静岡) 1115412
  - ⑤平尾 崇典(岡山) 223222
  - ⑥田中信一郎(大阪) 3531312
- 初日の1Rを長岡がまくった。1艇がマークしたため5コースだった。コンマ05のスタートも相まってチルト3度をしっかり生

かした。その後はノーマルなセツティングで逃げたりしたが、予選のラスト2走は6コース発進。6枠に組まれた準優も「ノーマルでは重さが取れない」と3度を選択、見事に勝ち上がった。しかし……。

優勝戦直前の1Rが追い風6メートル。3号艇という微妙な枠番も手伝って、長岡は取り付けに一時迷った。ままとそれを振り切った。チルト3度がもたらすエンジンパワーに信頼を寄せた。ここではスタート展示から、というより前日のインタビューから、スロ水域が紛れる要因が示されていた。田中の前付けは確実だった。

1号艇に陣取る作間には、節一の仕上がりとそれに伴う出来の良さ、そして優勝戦の枠番と、GIタイトルを奪取する最大のチャンスが訪れていた。しかし、本番でもスローは、深めに田中、間隔を取って作間、瓜生で並んだ。長岡は4カドの菊地を内に、マークに出た平尾を外に見る5コース発進。この起こし位置は初戦、準優でも経験していた。

ここでも6艇のスタートはさほど早くなかった。中でも珍しくジカ内の菊地が最も遅かった。長岡は1艇身残しに入らないぐらいのタイムング、これならメイチに握っていった。伸びまかせに一気に斜行し、勢いのままにバックに躍り出た。1マークを巧く回った瓜生がバックで、道中で接近してき

たが、チルト3度のアシで突き放して見せた。信じたセツティングの勝利だった。

その後、持ちペラ制が廃止されたことにより(12年4月)、長岡さんが「本物の3度男」と呼んだ阿波勝哉のような、6コース専門の選手は生きづらくなった。阿波の通算V19が全て6コースで、まくりが17回占めることには敬意を表するが、現行のプロペラ制度では1度だけ、12年12月で優勝歴は留まっている。現状はここで書いた矢後や長岡さんの流れを汲む、一発勝負型の投入でチルト3度は存在感を保っている。

ここまでチルト3度による記念優勝を書いたが、意外にも6コースは矢後の津周年だけだ。なるほど大外から記念を奪取するのは困難なミッションで、21世紀になつてから今年のグラチャンまで(01年〜24年6月)、GI以上の競走が1121回行われ、6コースの優勝は28件。確率にすると2・49%に過ぎない。これをSG競走に限ると、210レース中6回の2・85%と少し上がる。

6コースまくりは更にレアである。28件中4回で、この中に矢後の津周年が含まれる。多くが差し。まくり差して15回、抜き・恵まれは9回だ。一方、SG優勝戦の6コースまくりはない。ボートレース黎明期に見つかつても信憑性に欠ける。

21世紀最初の6コースによるS

G制覇は、2003年のことだった。ところはまた平和島、伝統が息づいている。1981年のモーターボート記念(高峰幸三)、1992年の全日本選手権(服部幸男)、この2003年の笹川賞、この後2014年のグランプリ(茅原悠希)と、不思議と11年毎に6コースのSG覇者を出してきた。と書いて来年のSG日程を見ると平和島がない……。ともかく03年の笹川賞だ。キーワードは翔んで埼玉!? 平和島なのに何故か埼玉。

### ◎第30回笹川賞競走

平和島(優勝戦・03年6月1日)

- ①今垣光太郎(石川) 2213511
- ②池田 浩二(愛知) 111121
- ③鳥野 賢太(徳島) 231311
- ④石田 政吾(石川) 3133332
- ⑤加藤 峻二(埼玉) 353132
- ⑥平石 和男(埼玉) 1144232

池田が抜群の成績だった。予選ラストで不良航法を取られ、準優1枠を逃したが、そこをキツチリ2コース強攻。「三拍子揃ったアシ」で乗ってきた。だが、イン取り濃厚の今垣も「80でも持つアシ」ときっぱり。前年の植木通彦とのハイレベルな頂点争いが、まだ記憶に新しかった。二強対決……ここに鳥野が割って入るかどうか。当地の周年V2の水面巧者、「自分にしては珍しく出ている」さばき一本ではなかった。

注目は他のところにもあった。

# 伝説の航跡

加藤峻二の名前がある！ 96年の総理大臣杯以来のSG優出、そのときも平和島だったが、当時ですら54歳と超ベテランだったのに今回は61歳。3日目の4カドまくりで準優勝圏内に突入し、予選最終日もボーダー上に留まった。準優勝は追い上げ抜いての2着というから、観客大喝采の優出劇となった。

もう一人の埼玉支部が平石だ。大先輩の加藤と外枠に並んだ。密かに意識していたのは、これまでの記念V5は4コースか5コースだったが、枠番が2枠・1枠・3枠・4枠・5枠。今回の6枠に思うところがあった。ターン回りに重さはあつても伸びは上位級と自負していた。

優勝戦の進入は枠なりの5対1。「枠なりならスローでも」のコメント通り、加藤が早めに2マークブイに寄せていったために、内枠4艇がこれに呼応した。平石1艇がゆつくり6コースに持ち出した。伸び型の仕上がりで単独ダッシュを味方につけた。5↓4↓3コースをまくったところに、インの今垣に対して池田がツケマイ、内側がズッポリ空いた。

平石はグングン伸びた。立て直した今垣をバック半ばで捕えた。と、そこで後ろを見れば、1マーク早めに落として差した5号艇加藤ではないか。おっと埼玉ワンツーカー。更に歓声が大きくなった。平石は2マークを先に回って、後続に水を開けた。残念ながら加

## 第2回オーシャンカップ優勝戦(平和島)

| 着 | 枠 | 選手名   | 年齢 | 体重 | 進入 | ST |
|---|---|-------|----|----|----|----|
| 1 | ② | 熊谷 直樹 | 32 | 50 | 2  | 21 |
| 2 | ④ | 野長瀬正孝 | 29 | 52 | 5  | 21 |
| 3 | ⑤ | 植木 通彦 | 29 | 51 | 3  | 21 |
| 4 | ⑥ | 池上 裕次 | 32 | 54 | 6  | 21 |
| 5 | ③ | 濱村 芳宏 | 30 | 50 | 1  | 16 |
| 6 | ① | 太田 和美 | 24 | 51 | 4  | 20 |

2連単②④ 3000円 まくり

## 第53回つつじ賞王座決定戦優勝戦(津)

| 着 | 枠 | 選手名   | 年齢 | 体重 | 進入 | ST |
|---|---|-------|----|----|----|----|
| 1 | ② | 矢後 剛  | 38 | 53 | 6  | 36 |
| 2 | ③ | 辻 栄蔵  | 31 | 50 | 2  | 36 |
| 3 | ① | 濱野谷憲吾 | 31 | 53 | 1  | 40 |
| 4 | ④ | 山崎 智也 | 30 | 50 | 3  | 38 |
| 5 | ⑤ | 坪井 康晴 | 27 | 50 | 4  | 43 |
| 6 | ⑥ | 高沖 健太 | 24 | 53 | 5  | 43 |

3連単②③① 6130円 まくり

## ダイヤモンドカップ優勝戦(平和島)

| 着 | 枠 | 選手名   | 年齢 | 体重 | 進入 | ST |
|---|---|-------|----|----|----|----|
| 1 | ③ | 長岡 茂一 | 42 | 54 | 5  | 17 |
| 2 | ② | 瓜生 正義 | 32 | 50 | 3  | 19 |
| 3 | ⑤ | 平尾 崇典 | 35 | 49 | 6  | 20 |
| 4 | ⑥ | 田中信一郎 | 35 | 51 | 1  | 15 |
| 5 | ④ | 菊地 孝平 | 29 | 51 | 4  | 24 |
| 6 | ① | 作間 章  | 28 | 51 | 2  | 18 |

3連単③②⑤ 9330円 まくり

## 第30回笹川賞優勝戦(平和島)

| 着 | 枠 | 選手名   | 年齢 | 体重 | 進入 | ST |
|---|---|-------|----|----|----|----|
| 1 | ⑥ | 平石 和男 | 36 | 50 | 6  | 24 |
| 2 | ③ | 鳥野 賢太 | 35 | 50 | 3  | 29 |
| 3 | ① | 今垣光太郎 | 33 | 50 | 1  | 25 |
| 4 | ② | 池田 浩二 | 25 | 52 | 2  | 25 |
| 5 | ⑤ | 加藤 峻二 | 61 | 50 | 5  | 27 |
| 6 | ④ | 石田 政吾 | 32 | 52 | 4  | 24 |

3連単⑥③① 20870円 まくり差し

藤は鳥野に内を突かれ、2周1マークでは今垣の接近も許した。それでも2艇を振り切ろうと懸命にファイトしたが、その間に池田にも追いつかれ結果5着に終わった。「出来たら埼玉でワンツーカーが良かった」悔しきは残っても「平石が勝って良かった」清々しい敗者の姿がそこにあつた。

このシリーズの直前、埼玉支部は木村厚子さんの殉職という、シヨックで悲しいニュースに見舞われた。ボートレーサーとして頑張った。美人レーサーとして業界のイメージアップに努めた人だ。彼女がいたことを束の間でも、この文章で思い出していただければ幸いだ。平石和男の快走と加藤峻二の健闘は、せめてもの癒しになった。

加藤さんは10年後の71歳で、ボートレースの最年長優勝記録を作った。その2年後まで現役を続けた。いま奮闘している高塚清一、高橋二郎の指針となり、ボートレーサーが目指す一つの選手像を作った。

平石のSG優勝は、現実的にはこの1回に終わりそうだが、それが6コースのまくり差というものが、いかにも彼らしい。記念タイトルは11まで伸び、イン逃げを2回加えたものの、全体的には4コース5回、5コース3回、6コース1回。13年の11回目も5コースまくり差しと、インが強くなるさなかでも、平石和男は平石和男だった。

この11回目は平和島59周年、4度目の当地における記念優勝となった。地元戸田では1回しか勝っていないのに、如何にレーススタイルが平和島とマッチしていたかが分かる。同期で同支部ながら2歳年長で、レーサーのキャリアで先を走った池上裕次が、その記念優勝6回全部が地元戸田に限られたのは対照的だ(今回書いてあるオーシャンカップのように、他所でも戴冠のチャンスは何回もあつたが)。池上さんは4年

前に引退されているが、平石は現役でA級をキープしている。

時系列的に6コースのSG制覇を追うと、この後が翌年の住之江、賞金王決定戦だ。田中信一郎3度目のグランプリ制覇にして、選出順位の面からも、トライアルの足取りも、何より優勝戦の展開が、冒頭の二行に叶うのだが、如何せんここまで文章を費やし過ぎた。改めて触れたいと思う。まあ、今回のテーマならレース場は平和島、レーサーは東京、そして関東に偏るのは必然かもしれない。

現在のボートレースの売上が、イン戦の信頼度に支えられているのは否めない。とはいえ、波乱が隣り合わせにあるから、逃げの結果がより楽しめる。中でも最大のパラドックスが6コースの躍進だ。チルト3度はスパイスだ。時に派手な空中戦を観たいものである。